まちづくり懇談会 結果

日時：令和元年6月25日（火）
午後6時30分～8時30分
会場：コミセン第1会議室

～テーマ「子育て」「教育」～

Bグループ

【前半】

○参加者 4名

○懇談内容

- ・認定こども園は、今まで少なかった研修の機会を確保して、小学校入学までに身に付けたい10の力を身に付けることができるよう取り組んでいる。保育士不足により0歳児などで待機児童が発生している。
- ・家庭の変化で、認定こども園や放課後児童クラブのニーズはこれからも下がらないことが予想される。放課後児童クラブは、塾や少年団など放課後の過ごし方の多様化で、保護者のニーズと施設のサービスがずれることが予想される。多様な働き方の受け皿としては、国の制度に沿っているとそのうち限界がくる。広尾町ならではの形を模索しなければならない。
- ・今、豊似小学校で放課後の一時預かりの話が出ている。色々な形、ニーズの変化に対応していかなければ。
- ・現行の制度からはみ出る場合に、地域が主体となり、地域のパワーを生かして、地域の工夫でどう対応するか。
- ・池田氏（全国コミュニティライフサポートセンター理事長）は、福祉の制度からはみ出て、後で制度が追い付いてくると言っていた、
- ・前任校で元教員や元保育士が中心となり放課後の一時預かりを行っていたが、長くやっていく中で、中核の人が高齢化し、継続が課題となっている。
- ・少年団の指導者も代替わりしていく。
- ・ボランティアはまちづくりの核心となるものだが、本当の意味でのボランティアが広尾町では育っていない。地縁、血縁に基づかない自発的なボランティアを育てていかなければならない。町内会も将来的に限界が来るので、機能しているうちに替わりになるネットワークを作らなければ。
- ・広尾っ子応援団は、既存の団体を活用しつつ、それらの枠組みに縛られない仕組みを構築しようとしている。
- ・広尾っ子応援団には、現在57名が登録しており、広尾町にも本物のボランティアが育つ可能性を感じている。
- ・学校に関わってみたい人が多くいる。人と人が繋がっていくと色々なことを続けてい

くことができる。

- ・先生方は、中堅が多い。子ども達の10年先、20年先を見通しているわけではなく、今の子ども達をどう育てるかで精いっぱい。
- ・まちづくりは、若い女性が来たくくなるような、魅力を感じるまちを目指しては。
- ・広尾高校では、町内企業の合同説明会を実施しており、今年で3回目を迎えた。説明会は進学希望の子も含む全学年が参加する。最近、町内に就職する人が増えてきた。町内に魅力的な働き口があれば高校生に対してもっとPRしてほしい。
- ・広尾町で進学、就職することの良さや希望を企業や産業の人が子ども達にもっと語れるようにならなければ。
- ・企業が高校生にその仕事の魅力を語る時に、就職後の育成方針やキャリアアップの部分もアピールすると良いのでは。大学進学希望者も将来的には広尾町に戻ってくるかもしれないという考えも必要。大企業だけでなく、小さな事業所も含めてビジョンの繋がりが必要。

【後半】

○参加者 4名

○懇談メモ

- ・今の広尾中の生徒は、素直で、何でも包み隠さず話す印象。悪気が無くトラブルに発展する場合もあり。思春期になると段々口数が減る。
- ・広尾中の卒業生57名中、約6割の38名が広尾高校に進学する。大樹高校は地元からの入学が約4割、残りが他のまちの7校から入学する。
- ・高校を選択する中学生に対し、広尾高校に入るとどういう姿で卒業できるかを大人達が語ることができるかどうか。
- ・広尾高校に進学しても、努力すれば国公立大学に行ける。せつかく中高一貫に取り組んでいても町外に流失してしまうのはもったいない。帯広の進学校との教科書の違いなどをどのようにフォローしていけるか。
- ・保護者の意識も変えないとならない。
- ・今年、中学生が東京へ修学旅行に行ったので、そのまとめの中で、東京を見てきた目で、都会である東京と田舎である広尾町を比較し、広尾のまちをどのようにしたいかを考える機会としたい。
- ・将来目指す職業に応じた進路指導を行うべき。
- ・教科書を学ぶのではなく、教科書で学ぶということ。目標を持たせ、自発的な努力を引き出すことができれば。教科書の違いはそれほど関係ない。
- ・まちづくりワークショップで、「目立ちたくない風潮」という分析があったが、それはまさに自己肯定感の低さを表しているのでは。親などの大人が、子どもがやってきたことを認めてほしい。
- ・中学生は自己肯定感が低く、授業であまり手を挙げない。
- ・広尾の子どもを見ると、広尾のことをあまり好きではないように感じる。

- 広尾のことを好きでないのは、まちづくりに関わっている意識が無いから。お客さんであり傍観者である。ほんの一部でも自分の思いを実現できる体験をすると、まちの好きな部分が増えて広尾への愛着が増し、住みたいまち、好きなまちになっていくのでは。